

第5章 民話

雨が少ない淡路島では、昔から農業用水の確保に悩まされてきました。かんばつ(日照り)が続くと、水飢饉や水争い、耕作放棄が起きるなど、水が島民にとってどれほど大切であったかが伺えます。このような事態から少しでも解消されるために降った雨水を

大切に確保しようと、多くのため池が造られました。

このようななかで、ため池に関する逸話や昔話が数多く残されています。

この章では、その中から4つの話を紹介します。

1 美女池(南あわじ市北阿万新田北)



ある夏の朝早く、お百姓さんが山へ仏さんにお供えするシキビをとりに行きました。池のほとりにさしかかると、山あいから池の面にかけて白く霧がたちこめ、絵にかいたような美しい朝景色です。あまりの美しさにみとれていると、水の中から美しい女の人あらわれました。これは不思議と、お百姓さんはこぶしで目をこすってみましたが、見まちがいはありません。「池の中から美女が現れた。」と、びっくりして山へ行くのをやめて、家にひきかえし近所の人たちに話しました。うわさが広がり、「よし、わしも池へ行って美女に会ってやろう。」と、村の元気者が二、三人連れだって池へ行きましたが、ふだんと変わらない池があるだけでした。



その後、だれも美女を見たという者が現れず、日がたつにつれ、いつかこのうわさも消えてしまいました。ふたたび、夏がきました。庄屋さんが朝早く供の人をつれてこの池にさしかかると、なまぐさい風が吹いてきて、朝もやが立ち込める池の面に、美しい女の人立っているではありませんか。庄屋さんは、「去年うわさのあった美女とは、まさしくこのことだな。」と、すぐさま引き返して、村の人びとに話しました。いままで信用していなかった人たちも、今度は二人を見たということや、庄屋さんの話だということですから信用しました。そんなことがあって、だれ言うともなくこの池のことを、美女の出る池、美女池とよぶようになりました。ある法師さんがこんなことをいっていました。

「大蛇は川に百年、池に百年、海に百年の修行をつんで天に昇る力を得る。ちょうど潮崎から来た大蛇は池で修行中、たいくつしにぎに人々をびっくりさせたのだろう。」
今では埋まって分からなくなっていますが、美女池に

は奥深い洞くつがあったということです。また、阿万の潮崎にも蛇穴といわれる洞くつがあったそうです。昔の人は、潮崎から美女池まで穴が通じていたと思っ
ていました。

引用:美女池

2 市池(南あわじ市倭文神道)

むかし、しずおりというおりものが伝わった地倭文に大きな池があった。秋の台風がやってくるころになると、池の堤ぼうがきれて困っていた。

「なんとか池のていぼうがきれないようにするええ工夫がないかのう。」

「うん、そうじゃ、こんげ(こんなに)たびたびきれると、たまらんわい。」

村人たちはこういながら治水工事をしていた。

「うんそうじゃ、この堤に人柱を入れたらええんじやい。つつみがきれんとど事じやい。」

「なに、人柱!」

「だれがはいるんじやい。」

みんなだまりこんでしまった。

「だれか入る勇気のある者いないかい。」

「芳兵衛はどうじゃ。」

「わしゃまだ、命がおしいでのう。」

誰も入るものがない。いろいろ相談していると、

「そうだ市のおまえどうじゃ、いいだしたんだ一つ命をめぐんでおくんざらんか。」

「そりゃええ、いいだしよった者が入るとえいや。」

みんなは、がやがやいいだしたが、誰も入る人がいない。たまたま、市から人夫にきて働いていた男がはいることになった。

人柱にきまった人の家族は大変悲しがり、二十一日分のたべ物をもって水さかずきで別れをおしんだ。

「おとうったら、そんげ(そんな)こと言うからよ。」

「それはあまりにかわいそうじゃ。」

男は肉親とわかれを惜しんで、ある日みんなの見まもる中を、静かに池の堤にやってきた。かんねんしたのか、落ち着いた口調で、



「わし一人がぎせいになれば、この池の堤がきれないのなら……。」

と巡礼風の着物にはかま、鐘と二十一日分の食りょうをもって堤深く掘られた穴へ静かにはいっていった。生きている間はずっと鐘を鳴らすため、息抜きをしておく。すみきった秋空の下、細いがひびきのある鐘の音は堤の中から遠くまで鳴りひびく。

「チーン、チーン。」

きょうも、きこえる、かわいそうに、澄みきった日は現在の市の生家まで聞こえたという。

家族は、市の生家から毎日かわるがわるこの音をきき、めい福をいのった。十日たち十五日たった。こうして十七日目、鐘の音はだんだん細く小さくなってきた。十八日目からは聞こえない。

以後数百年に及ぶ今日まで池の堤がきれたということ聞かない。淀川にも人柱が入っていると言いつたが、倭文の神道の地にもこうした伝説がある。そしてそれ以後池の名前を人柱となった人の出生地名をとって「市池」と名づけられたそうである。

今なお秋の夕ぐれになると、鐘の音が鳴ると言われている。

引用:郷土の民話淡路編

3 かぶといけ いで 兜池(淡路市井手)

「無念ッ、これ以上抵抗したとて何になろう。いたずらに人命を落とすばかりじゃ。」

山田原城主、菅越後守は焼け落ちる本丸をふり返り、ふり返りながら城を後にした。

1428(正長元)年 菅為行が、ここに居を構えてから約150年余りになる。時勢の流れとはいえ弱肉強食の戦国時代、越後守はどうするすべもなかった。

越後守とその子安吉らは、追手を逃れて竹谷まで来た。家来のひとりが、

「殿、その兜をおぬぎください。」

「それはまたどうしてじゃ。」

「殿の兜が目立ちます故、発見されやすいと存じませぬ。そうしますと。」

「うん、わかった、とろう。」

越後守は、木かげに寄り兜をとった。兜には梅ばちの紋が入り光っていた。文章博士といわれた菅原道真の流れをくむ家紋を、じっと見つめていた。

「そうだ奥井家老のいう通り、あたら尊い命を落とすこともあるまいに。」

越後守は、

「さて、この兜をいかにすればよいものか。」

「殿、池の底に埋めておいてはいかがでござりまするか。」



「えッ、池の底に。」

「はい、池の底では絶対見つかる気づかいはござりませぬ。」

「それもそうじゃ。」

奥井家老は、越後守の兜を水面深く埋めた。やがて、敵の軍勢が追ってきたが、城主なるものあかしががないため、とらえられなかった。その後越後守は、山田原に居住慶長五年他界したという。

越後守の子安吉は、竹谷の菅太郎左衛門方に身を寄せ、後養子になった。この兜を埋めた池を兜池といい、今に兜が埋まったままにあるそう。

引用:淡路・いちのみやの伝説



4 ひしいけ やなぎさわ 菱池(淡路市柳沢)

「どうしたのじゃ娘ご、この夜更けに山道の一人歩きは危険だぞ。どこまで行かれる。」

納滝左衛門は、菱池のそばに立っている美しい娘に声をかけた。松の梢からもれる月あかりに娘の顔はいっそう青白く、心なしか不気味にさえ思われる程すき通って見える。何を言っても答えず、娘はただエヘラ、エヘラと笑っているのみ、

「どうして答えぬのじゃ、わたしは御鉄砲役納滝左衛門であやしい者ではござらぬ。」

やっぱり娘は笑っているだけである。

「のう娘ご、私は江井浦の御留守居番より御用を仰せつかり、洲本の稲田城代家老様にお会いしての帰りじゃ、お送りしようか。」

聞こえるのか、聞こえないのか黙って笑っている娘を見た滝左衛門は、

(そうだ、菱池に狸か狐がいると聞いていたが、これはキャツであろう。いくら話しても返答をしないからな)

「キャツめ、私をばかそうとしてもだめだぞ。やいやい、一刀のもとに切り捨てようぞい。覚悟いたせッ。」

「ひゃあー。」

たしかに手ごたえはあった。しぼるような悲鳴があがったかと思うと、真っ赤な血があたりへ飛び散った。

「しめしめ、今のは狸、菱池越えのこの道でよく悪さをしていたものだ。これで退治した。これから大勢の人が大助かりじゃよ。アハハハ。狸め、思い知ったであろうぞ。」

ひとり言を言いながら、滝左衛門は意気揚々と家に帰ってきた。

「おーい。今戻ったぞ。実はな菱池でこういうことがあったのじゃ。」

狸を退治した話を誇らしげに語り、話に花を咲かせた。

翌日、刀を改めてみると刃先が全部ボロボロに欠けてしまっていた。びっくりした滝左衛門は、

「おや、これはどうしたことか、古狸を確かに退治し手ごたえがあり、真っ赤な血が一面に飛び散ったのに。」

不思議に思い、昨夜娘に出会った菱池の淵へ行ってみた。滝左衛門は思わず、

「おや、血の跡がない、一体どうしたというのだ。確かに狸を切りつけたのに。」

血潮の流れたあととてなく、大岩の上に刀の破片が散らばっているのみ、

「さては、狸にだまされたのか、残念一。」

くやしさに、言葉も出ない滝左衛門であった。

引用:柳沢の民俗



第6章 信仰の話

日本には、地域によって異なった風習や信仰などがあります。淡路島にも他の地域にはない独特な風習や信仰があり、その中

でも、農業用水の確保やため池の安全祈願に関するものが、さまざまなため池でとり行われています。

1 雨乞い

昔から水不足に悩まされてきた淡路島ではかんばつが続き水不足になると、寺社での雨乞い祈禱や淡路人形による「雨乞い芝居」を行ったり、雨乞山とよばれる山や丘で火をたくなど、さまざまな雨乞い祈願が各地で行われていました。

例えば、南あわじ市の神代の龍ヶ丘には、水の神様として親しまれている龍の頭部に似た大きな岩があり、その前で火をたき雨乞い祈願が行われていました。龍が水の神様として親しまれてきた理由として、池で修業をしていた大蛇が修業を終え、天へと昇り、龍となって雨を降らすためだと考えられています。

また、淡路市生穂にある雨乞山では、現在も雨乞い祈願の神事がとり行われています。江戸時代の享保から天命にかけての大飢饉のとき、山頂に水の神「天之水分神」と火の神「愛宕の神」をまつり、雨乞い祈願をしたところ、大雨が降ったのがこの雨乞山の起こりとされています。

以降、かんばつの年には、山頂で火をたき、

地元生穂の人たちが交代で数日間山にこもり、蓑笠の雨具をつけて「大雨たんもれ、じんぐいな、天に大雨ないかいな…」と唱えながら、鉦と太鼓を打ち鳴らして祈願を続けたといひます。

現在は、毎年5月初旬に雨乞町内会の人たちによって雨乞い祈願の神事がとり行われています。

参考：淡路祭事記365日



雨乞山の神事の様子

2 ため池にまつられている神様

淡路島のため池には、火の神様である「お不動さん（不動明王）」や水の神様である「弁天さん（弁財天）」と「水神さん」などがまつられている所が多くあります。火の神様であるお不動さん

は、ため池の水で怒りを鎮め、ため池を守るとされたために、江戸時代に多くまつられ始めたと考えられています。

お不動さん



かなやおおいけ かなや
金屋大池（洲本市金屋）



くろだいけ しづき
黒田池（淡路市志筑）



うらかべおおいけ じんだいらかべ
浦壁大池（南あわじ市神代浦壁）

水神さん



だいにしういけ あい や
大城池（洲本市鮎屋）

弁天さん



あわいけ いちせんじょう
泡池（南あわじ市市三條）

3 ひめ 樋抜き

「樋」とはため池の水を田に流すための栓のことで、「樋抜き」とは農業用水を各集落の田に配水するために、樋を抜く作業のことを言います。

昔、樋を抜く作業は、命がけの作業でした。そのため樋を抜く際に、地域ごとでさまざまなおまつりが行われます。

うらかべおおいけ 浦壁大池(南あわじ市神代浦壁)

毎年6月中旬の早朝に、浦壁大池のお不動さんの前に田主の代表が集まり、その年の農業用水の供給と豊作祈願を祈ります。お不動さんの前で御神酒とお供え物をし、代表者が祈禱を行った後、一人ひとりがお不動さんの前で手を合わせ、お祈りを行います。

その後、樋を抜きます。これによって、冬の間溜めていた水が流れ始め、代かき※が始まります。

※[代かき]

代かきとは田植えのために、田に水を入れて土を砕いてかきならす作業のこと。



浦壁大池(南あわじ市神代浦壁)の樋抜き式

こうだいけ 上田池(南あわじ市神代社家)

上田池では、農民たちが田植えを始める前に、水の神様に感謝するため、毎年6月17日または18日の早朝5時頃に樋抜き祭りが行われています。堤防上に祭場を設け、水の神様に御神酒・農産物を供え、農業用水の十分な供給と豊作祈願を祈ります。

その後、池の水をせき止めている樋のハンドルを回し、各集落の用水路へ水を流し込んでいきます。

参考:淡路祭事記365日

樋抜きの際に起きた悲しいお話も存在します。



ミトモリさんの供養塔
集落内で代々伝えられています。

淡路市野島轟木の観音堂境内には「ミトモリさん」と呼ばれる石碑が建っています。ため池の樋の操作は、その調整次第でその年の稲の収穫を左右する重要な仕事で、この役目を「水門守」と呼びました。「水門守」は、水田へ水を放流する際にため池に潜り、樋の栓を抜く作業を行います。しかし、樋を抜いた時の水の吸引力は強く、抜くタイミングを誤ると、水もろともに水門に引き込まれる危険を伴います。轟木集落の「水門守」は不幸にもそのタイミングを誤り、水門に引き込まれ命を落としたのです。村人はその死を悼み、大きな供養塔を建て、花や供物を供えて吊っています。

地元の方は子供の頃、祖父や母にこの話を聞かされ、「樋は絶対に触ってはいけない」と言い聞かされていたそうです。



カラカイ
この棒につかまって、樋を抜きます。

参考:稲作のマツリと祈り 淡路島の年中行事

4 あんぜんきがん 安全祈願

淡路市佐野にある板木池は明治初期に築造された池で、湧水等により水の透明度が高く、花卉栽培に適しており、明石海峡大橋が開通するまでは水道水への供給や水不足の際には飲料水として供給されていました。

この板木池では昔、水害で家畜が流されたことをきっかけに、毎年5月の申の日に安全祈願と五穀豊穡を願って佐野神社の神主による神事がとり行われています。



板木池(淡路市佐野)の安全祈願